

「大災害、今まで経験したことのない惨事に遭遇する。その復旧にあたる。台風一八号は、まさに未知の大災害だった。宇部支部、山陽町の竜三建設株式会社代表取締役社長 金林幸博さんと副社長平沼博司さんに「大災害復旧活動」の大変さを聞いた。

現場で、思わず立ちつくした

その日、朝から台風は激しさを増し、仕事にはならないと社員を帰した所へ、消防署から「二トントラックを貸して欲しい。植生地帯が水に浸かって道路が使えない。舟がいる。その舟を運びたい」とのこと。「まさか」と思いつつ現場へ。思わず立ちつくしたと平沼さんは言う。「今までの人生で、お目にかかったことのない状況にショックで動けなくなりました」の言葉で被害の大きさが感じ取れた。

最大の敵はなんと『ニオイ』

それでも復旧作業は始めなければならぬ。道路の確保。倒壊家屋、陸上に打ち上げられた船などの大量の廃材は処理しきれず、下



平沼 博司  
HIROSHI HIRANUMA  
竜三建設株式会社 副社長



廃材をトラックへ

あふれ出た糞尿などが混ざった臭いは耐え難く、頭の痛くなるほどであった。「死ぬ思いでした」と平沼さんは笑いつつも「作業中、最も重要なことは、このパニック状態の中で冷静に、現場を動かし、被災者を納得させてトラブルのない状態を作る指示系統の確立ですね。聞いても『解らない』、頼んで

も『ダメ』では、パニックは増すばかり。私も地元です。知り合いに頼まれても、作業手順で『今はダメ』というのはつらいですよ」と言う。

自分の『まちは自分達で守る

「仕事もします。でも、もしもの時は自分の『まちは自分達で守る』と二人は強く言う。「本業は協力会社に手助けしてもらってでも、作業を優先させます。これは、当社創業からの『伝統ですよ』と金林さんの言葉に続けて『この業界、俗に『雨が降れば暇になる』と言いますが、うちは防災準備や情報収集と逆に忙しくなります』と平沼さんは言う。その平沼さんは毎日、時間を見つけては町内を半周か一周は巡回し、天気予報は二回以上聞くことを日課にしていると言う。



集められた廃材の山

「私たちの仕事は騒音を出したり、通行の邪魔をしたりと迷惑が



廃材を片づけた後の整地作業



金林 幸博  
YUKIHIRO KANEYASHI  
竜三建設株式会社  
代表取締役社長

られますが、いずれは皆さまの役に立つ作業をしているのですから、ご理解の上、ご協力をお願いしたいですね」と金林さんは言う。この人たちが、いざという時、我々の安全も守ってくれる。「恐いからと逃げる訳にはいきませんから」と笑う二人。防災を本業としている訳ではない。でも命をかけて守ってくれる人たちが、こんな身近にいるのだ。二人の笑い声が頼もしく感じられた。

地球はやはり異常なのか？そんな思いにさせるほど、一九九九年、豊田地域は大災害の年となった。夏の台風、冬の大雪。どちらも前代未聞の災害だった。豊田支部、五人の皆さまに出席いただき、一九九九年を語ってもらった。

今までに見たこともない水と雪

「一年前のこと、もう記憶も遠のいてますよ」の一言で和やかに始まったかと思えた会談も、次第に真剣な熱をおびていった。大災害復旧活動に携わった皆さんにとっては、やはり決して『遠い記憶』にはならないようだ。

「台風一八号は、八三歳のお年寄りが『今までに見たことない』と言った。ということは、ここ百年近くはこんな台風はなかったと



川から水が溢れ周辺は水に浸かった



元の人も、役所も、私たちができても、すでに『喉もと過ぎれば』で『もうないじゃろ』と楽観的意見が出てきている。でも、『意義ある災害』にしなくてはいけない、今のうちに今後のためのマニュアルなども考えています」と皆さん前向きである。

トラブルは起こせません

もちろん、このマニュアルが、いつまでも取り出されることなく、災害の起こらないことが一番よいのはある。「私たちは従業員を時間外に出して、危険な作業をさせています。だから、何もないようにと願いながら送り出す復旧活動は、なければどんなに楽だろうと思いますよ」という。でもやるからには本気で取りかかる。それが防災活動、復旧活動でもある。でも、一般の人は無理解である。



大量の流木の処理作業

左から、西島さん、木本さん、長谷川さん、清水さん、花田さん



喉もと過ぎれば……

「唯一の救いは昼間の災害だったこと。作業も夜よりは楽だし、満潮時の予測もできたし、少し助かりました」と語る。そうこうしているうちに、冬。「除雪、三日間なんて経験なかった」「チェンなんてしばらく使ってなくて探しました」など口々に未体験話がある。「踏んだり蹴ったりはこの事」と男たちは今では笑う。「でも、この記録は残して今後に役立てることが大切だと思います。地

やっぱりイメージアップです

「だからと言ってトラブルは地域で仕事する私たちには本業に差し支えますからね」と言う。

「そこで、道路、河川清掃のボランティア活動には、揃いのハッピとノボリでアピールし、町の広報誌に取り上げてもらったりして、理解してもらう努力をしています。地味ですけどね」と笑う。ここで生活し、ここで仕事をやる。そのためには精一杯の努力を惜しまない。このことに誇りは持っているという皆さんも「やはりイメージを変えないと、今後の人材問題にも関わるんです。若者の少ないこの地域で、人材を確保するのは難しい。それを少しでもイメージアップで補えればと思います」と訴える皆さんの目は経営者の目であった。

ご出席いただいたのは、(株)西島組代表取締役・西島厚寛さん、(株)宮迫土木代表取締役・木本登樹夫さん、(株)ハナダ代表取締役・花田豊一さん、(有)清水組代表取締役・清水宏展さん、(株)ヒロ代表取締役・長谷川仁志さんでした。